劇伴倶楽部 Vol.17

THE MUSIC OF "Anne of Green Gables"

Introduction

本書は1979年1月7日から12月30日まで放映されたＴＶアニメ『赤毛のアン』の音楽について研究したものです。『赤毛のアン』のために作られた主題歌・挿入歌・劇中歌・ＢＧＭとそれらを収録したレコード、ＣＤを取り上げています。

『赤毛のアン』は筆者（腹巻猫）にとって大切な作品のひとつです。現在も売られている完全版音楽集ＣＤ「赤毛のアン 想い出音楽館」（2004年発売／コロムビアミュージックエンタテインメント）は筆者が提案した企画が初めて実現し、選曲・構成・取材・解説のすべてを担当したアルバムでした。『赤毛のアン』の音楽についてはＣＤの解説書に書きましたが、紙数の都合で書き足りなかったことや、その後、新たに判明したこともあります。折しも、今年2019年は『赤毛のアン』が放送されてから40周年。この機会に、もう一度、『赤毛のアン』の音楽のことをまとめておこうと考えました。

『赤毛のアン』の音楽を手がけた三善晃と毛利蔵人は現代音楽の作曲家で、映像音楽をメインに活動した作曲家でははありません。本書では純音楽の作曲家としての二人の仕事には踏み込みませんでした。それは筆者には荷が重く、また、『赤毛のアン』の話から離れて行ってしまうからです。あくまで、『赤毛のアン』の音楽に絞ってまとめました。

本書が『赤毛のアン』の音楽や本編を楽しむ手助けになれば幸いです。

目次

『赤毛のアン』作品データ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

三善晃・毛利蔵人と『赤毛のアン』の音楽 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

主題歌・挿入歌解説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

音楽解説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

ＢＧＭリスト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

ＢＧＭ解説 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

各話使用ＢＧＭリスト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

DISCOGRAPHY ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89

『赤毛のアン』と私 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101

『赤毛のアン』作品データ

放映データ

1979 年 1 月 7 日～12 月 30 日
フジテレビ系　毎週日曜日　19:30～20:00
１回 30 分連続・全 50 話

スタッフ

原作:ルーシー・モード・モンゴメリ
製作：本橋浩一
演出：高畑 勲
脚本：千葉茂樹、高畑 勲、磯村愛子、神山征二郎、神山魁三、高野丈邦、荒木芳久、白石なな子
絵コンテ：高畑 勲、池野文雄、奥田誠治、とみの喜幸、楠葉宏三、腰 繁男、横田和善、光延博愛、斉藤 博、馬場健一
音楽：毛利蔵人
主題歌・挿入歌：作詞・岸田衿子　作曲：三善 晃　歌：大和田りつこ
場面設定・画面構成：宮崎 駿（～#15）
場面構成：櫻井美知代（#18～）
美術監督：井岡雅宏
作画監督・キャラクターデザイン：近藤喜文
撮影監督：黒木敬七
録音監督：浦上靖夫
動画監督：前田英美
効果：松田昭彦
色彩設定：保田道世、小山明子
録音スタジオ：アバコスタジオ
現像：東洋現像所
プロデューサー：中島順三、遠藤重夫
制作：日本アニメーション、フジテレビ／別所孝治

キャスト

アン・シャーリー：山田栄子
マリラ・カスバート：北原文枝
マシュウ・カスバート：塊 柳二
ダイアナ・バリー：高島雅羅
ギルバート・ブライス：井上和彦
レイチェル・リンド夫人：麻生美代子
ミニー・メイ：小山まみ
バリー夫人：武藤礼子
ジョセフィン・バリー：川路夏子
ステイシー先生：鈴木弘子
アラン牧師：曽我部和行
アラン夫人：江川菜子
ジェーン・アンドリュース：高木早苗
ルビー・ギリス：小山まみ、高坂真琴（#34～）
ジョーシー・パイ：堀 絢子
ナレーター：羽佐間道夫

※氏名は当時の表記です。

放映リスト

放映日	話数	サブタイトル	脚本	絵コンテ
1/7	第 1 章	マシュウ・カスバート驚く	千葉茂樹、高畑　勲	
1/14	第 2 章	マリラ・カスバート驚く	千葉茂樹、高畑　勲	
1/21	第 3 章	グリーン・ゲイブルズの朝	磯村愛子、高畑　勲	
1/28	第 4 章	アン・生立ちを語る	高畑　勲	
2/4	第 5 章	マリラ決心する	神山征二郎	池野文雄
2/11	第 6 章	グリーン・ゲイブルズのアン	磯村愛子、高畑　勲	池野文雄
2/18	第 7 章	レイチェル夫人恐れをなす	神山征二郎	奥田誠治
2/25	第 8 章	アン日曜学校へ行く	神山征二郎、高畑　勲	とみの喜幸
3/4	第 9 章	おごそかな誓い	神山征二郎	とみの喜幸
3/11	第 10 章	アン・心の友と遊ぶ	神山征二郎、高畑　勲	楠葉宏三、 腰　繁男
3/18	第 11 章	マリラ・ブローチをなくす	神山征二郎	奥田誠治
3/25	第 12 章	アン・告白する	神山征二郎、高畑　勲	とみの喜幸
4/1	第 13 章	アン・学校へ行く	神山征二郎、高畑　勲	奥田誠治
4/8	第 14 章	教室騒動	神山魁三	奥田誠治
4/15	第 15 章	秋の訪れ	神山征二郎	とみの喜幸
4/22	第 16 章	ダイアナをお茶に招く	高野丈邦	奥田誠治
5/6	第 17 章	アン、学校にもどる	神山征二郎、高畑　勲	とみの喜幸
5/13	第 18 章	アン、ミニー・メイを救う	神山征二郎、高畑　勲	奥山誠治
5/20	第 19 章	ダイアナの誕生日	高野丈邦	横田和善
5/27	第 20 章	再び春が来て	高野丈邦、高畑　勲	腰　繁男
6/3	第 21 章	新しい牧師夫妻	千葉茂樹	楠葉宏三
6/10	第 22 章	香料ちがい	千葉茂樹	横田和善
6/17	第 23 章	アンお茶によばれる	千葉茂樹、高畑　勲	腰　繁男
6/24	第 24 章	面目をかけた大事件	千葉茂樹	楠葉宏三
7/1	第 25 章	ダイアナへの手紙	高野丈邦、高畑　勲	横田和善
7/8	第 26 章	コンサートの計画	千葉茂樹、高畑　勲	奥田誠治
7/15	第 27 章	マシュウとふくらんだ袖	高野丈邦、高畑　勲	腰　繁男
7/22	第 28 章	クリスマスのコンサート	高野丈邦、高畑　勲	光延博愛
7/29	第 29 章	アン、物語クラブを作る	高畑　勲、横田和善	高畑　勲、 横田和善
8/5	第 30 章	虚栄と心痛	高畑　勲、高野丈邦	楠葉宏三
8/12	第 31 章	不運な白百合姫	荒木芳久、高畑　勲	斉藤　博
8/19	第 32 章	生涯の一大事	千葉茂樹、高畑　勲	腰　繁男
8/26	第 33 章	クィーン組の呼びかけ	千葉茂樹、高畑　勲	横田和善
9/9	第 34 章	ダイアナとクィーン組の仲間	千葉茂樹、高畑　勲	楠葉宏三
9/16	第 35 章	夏休み前の思わく	荒木芳久、高畑　勲	腰　繁男
9/23	第 36 章	物語クラブのゆくえ	高野丈邦、高畑　勲	横田和善
9/30	第 37 章	十五歳の春	高野丈邦、楠葉宏三	楠葉宏三
10/7	第 38 章	受験番号は 13 番	千葉茂樹、高畑　勲	馬場健一
10/14	第 39 章	合格発表	千葉茂樹、高畑　勲	腰　繁男

10/21	第 40 章	ホテルのコンサート	荒木芳久、高畑　勲	横田和善
10/28	第 41 章	クィーン学院への旅立ち	荒木芳久、高畑　勲	楠葉宏三
11/4	第 42 章	新しい学園生活	荒木芳久、高畑　勲	馬場健一
11/11	第 43 章	週末の休暇	神山征二郎	腰　繁男
11/18	第 44 章	クィーン学院の冬	神山征二郎、高畑勲	横田和善
11/25	第 45 章	栄光と夢	千葉茂樹、白石なな子	楠葉宏三
12/2	第 46 章	マシュウの愛	千葉茂樹、白石なな子	馬場健一
12/9	第 47 章	死と呼ばれる刈入れ人	荒木芳久、高畑　勲	腰　繁男
12/16	第 48 章	マシュウ我が家を去る	荒木芳久、高畑　勲	横田和善
12/23	第 49 章	曲り角	荒木芳久、高畑　勲	楠葉宏三
12/30	第 50 章	神は天にいまし　すべて世は事もなし	荒木芳久、高畑　勲	馬場健一

『赤毛のアン』は日本アニメーション制作の「世界名作劇場」第５作目となる作品である。『アルプスの少女ハイジ』（これはズイヨー制作で「世界名作劇場」に数えない）『母をたずねて三千里』に続いて高畑勲監督が手がけた３作目の名作アニメ（少年少女向けの名作文学をアニメ化した作品）だった。原作は世界的に有名なＬ.M.モンゴメリの少女小説『赤毛のアン』。場面設定の宮崎駿、美術監督の井岡雅宏、音響監督の浦上靖夫ら『ハイジ』『三千里』に参加したスタッフが本作にも参加した。

高畑勲監督は原作にある膨大な台詞を生かし、また原作のユーモア小説としての一面に着眼して、『ハイジ』とも『三千里』とも異なるスタイルで映像化・演出を試みている。11 歳から 15 歳まで、アンのキャラクターを少しずつ成長させたキャラクターデザイン・作画監督の近藤喜文、プリンス・エドワード島の美しい情景を抑えた色彩で表現し、少女の物語に華をそえるために手間のかかる部屋の壁紙を描く英断をした美術監督の井岡雅宏ら、意欲的なスタッフが高畑演出を支えた。音楽も例外ではない。アニメでは、原作では詳細に描かれていない終盤の展開――アンが 15 歳になってからラストまでのエピソード――を約１クールかけてじっくり描き、成長したアンや年老いていくマリラとマシュウの想いを繊細に表現している。結果、『赤毛のアン』は原作に忠実でありつつ、アニメ独自の魅力を持つ作品となった。本作は「世界名作劇場」の中でも屈指の名作として、今も多くのファンに愛されている。

三善晃・毛利蔵人と『赤毛のアン』の音楽

●高畑勲監督と音楽

『赤毛のアン』の監督（クレジットは演出）・高畑勲は音楽にこだわってきた演出家である。
監督デビュー作である『太陽の王子ホルスの大冒険』(1968)からすでに、村人が総出で川で魚を獲る場面や村の結婚式の場面など、音楽と映像が一体になった印象深いシーンを作っている。そしてなにより、物語の中で重要な役割を果たすヒルダの歌。「大冒険」のタイトルにふさわしい活劇の場面よりも音楽が絡むシーンのほうが印象に残る。
『アルプスの少女ハイジ』(1974)では、第１話の音楽を映像に合わせたフィルムスコアリングで制作した。しかも、フィルムを映写しながら音楽を録音するという映画音楽なみの手間をかけている。『母をたずねて三千里』(1976)では、ペッピーノ一座やアンナ、トニオら、マルコと絡むキャラクターが劇中で奏でる音楽や歌が印象的だった。『セロ弾きのゴーシュ』(1981)はまさに音楽が主役になった作品である。
『赤毛のアン』も例外ではない。劇中で音楽を演奏するシーンや歌うシーンがたびたび登場する。また、劇中に挿入歌が積極的に使用された。「森のとびらをあけて」「涙がこぼれても」「あしたはどんな日」などなど。高畑勲作品で、これほど挿入歌が多用された作品はほかにない。高畑監督が音楽を演出の重要な要素と考えていたことがうかがえる。

●中島プロデューサーの提案

『赤毛のアン』の音楽は、主題歌・挿入歌の作曲を三善晃、劇中音楽（ＢＧＭ）と挿入歌の作曲を毛利蔵人が担当する共作で作られている。毛利蔵人は三善晃の愛弟子であるから、師弟でひとつの作品の音楽を手がけたわけである。

『赤毛のアン』の音楽に三善晃を推薦したのは、日本アニメーションのプロデューサー・中島順三であった。そのことについて、高畑監督は次のように記している。

「主題歌をどうするかであれこれ迷っていたとき、プロデューサーの中島さんが三善晃という人はどうかしら、と提案した。『翼は心につけて』の主題歌がよかったという。音楽詩劇『オンディーヌ』以来、私は一ファンとして三善晃のさまざまな音楽に接してきたけれども、映画の仕事をする人だとは思っていなかった。おおいに興味をそそられたが映画を見に行く暇がない。早速カセットに録音して来てもらった。良かった。主題歌は爽やかで気持ちに溢れ、しかも今の若い人にアピールしそうな曲になっていた。いっぺんに期待がふくらんだ。」（「『赤毛のアン』、音楽の思い出」、ＣＤ「EVER GREENN シリーズ　赤毛のアン」解説書）

三善晃は 1933 年生まれ。東京都出身。作曲を平井康三郎、後には池内友次郎に師事。東京大学仏文科在学中にパリ国立高等音楽院に留学。東京大学卒業後、東京藝術大学講師、1966 年桐朋学園大学教授を歴任。多数の管弦楽曲、室内楽曲、合唱曲などを作曲した日本現代音楽を代表する作曲家のひとりである。2013 年に 80 歳で他界した。
偶然にも高畑勲も東京大学仏文科出身である。高畑監督は 1935 年生まれ。大学でニアミスしていた可能性もある。

高畑監督が「映画の仕事をする人だとは思っていなかった」と言うとおり、映像音楽の仕事は少ない。『赤毛のアン』以前には、ＴＶドラマ『室内楽』(1961)、『妹はまだ……？』(1966)、ＮＨＫ大

河ドラマ『春の坂道』(1971)のテーマ曲、映画『翼は心につけて』(1978)があるくらい。ドラマ以外の映像作品では、松本俊夫実験映像集『西陣』(1961)、記録映画『力の技術ーモートルー』(1963)といった作品がある。これ以外にもあるかもしれないが、資料不足で確認できなかった。

このうち、『春の坂道』はテーマ音楽のみの作曲で、本編の音楽は間宮芳生が担当している。間宮芳生は『太陽の王子ホルスの大冒険』『セロ弾きのゴーシュ』『火垂るの墓』などの音楽を手がけた高畑作品における重要な作曲家。これも奇しき偶然である。

●映画『翼は心につけて』

ここで『翼は心につけて』がどんな映画であるか紹介しておこう。

2014 年に紀伊國屋書店から DVD が発売された。

『翼は心につけて』
企画・製作：山口逸郎
原作：関根庄一
脚本：寺島アキ子、堀川弘通
監督：堀川弘通
音楽：三善 晃
音楽指揮：尾高忠明
制作・翼プロダクション（第１回作品）
配給・共同映画全国系列会議

主題歌「翼は心につけて」
作詩：吉原幸子　作曲：三善 晃　歌：横井久美子

1978 年 10 月 14 日公開
昭和 53 年度芸術祭参加作品

原作は関根庄一編著『翼は心につけて―ガンと闘って死んだ十五歳の少女が教えてくれたこと』（一光社）。中学３年生の少女・鈴木亜里（あさと）が骨肉腫に冒されながらも懸命に生きる姿を描いた作品である。鈴木亜里を演じた石田えりは本作でデビューした。出演はほかに、フランキー堺、香川京子、山本圭、鈴木瑞穂、山口崇、宇野重吉ら。派手な展開や演出はないが、病と闘いながら明るく生きる少女・亜里と彼女を見守る周囲の人物の姿をストイックに描き、静かな感動を呼ぶ作品だ。

三善晃は劇中音楽と主題歌を担当している。

重要なのは主題歌である。主題歌は映画タイトルと同題の「翼は心につけて」。詩人の吉原幸子が作詞、三善晃が作曲し、シンガーソングライターの横井久美子が歌唱している。オーケストレーションなどに『赤毛のアン』主題歌と共通するものがある。『赤毛のアン』の主題歌のイメージの原型となったものが「翼は心につけて」なのだ。残念ながら、この主題歌は音盤化されていない。

●三善晃と毛利蔵人

高畑勲は中島プロデューサーとともに、三善晃に主題歌作曲の依頼に行った。

三善晃は当時、桐朋学園学長の要職にあって激務の上、体調も万全でなかった。主題歌２曲と挿入歌３曲の作曲をするのが精一杯で、残りの音楽を毛利蔵人が引き継いで作曲することになった。三善晃は自ら毛利に電話して事情を説明し、高畑勲と中島プロデューサーに「僕の音楽をよく分かっている人だから」と毛利を紹介した。

毛利蔵人は 1950 年生まれ。兵庫県出身。三善晃の「交響三章」を聴いて作曲家を志し、ピアノ、ビオラ、チェロを独習。音楽大学には進まず、1971 年から翌年にかけて桐朋学園大学図書館に勤めながら三善晃に師事し、作曲を学んだ。

毛利蔵人はペンネームだった。モーリス・ラヴェルとクロード・ドビュッシーから採ったものである。このことからも、毛利のフランス近代音楽への傾倒がうかがえる。のちに、毛利蔵人の名を本名としている。

管弦楽曲、室内楽、歌曲、合唱曲などあらゆるジャンルの作品を発表。映画、舞台、テレビ、ラジオ などの音楽も数多く手がけたが、惜しくも、1997 年に 46 歳の若さで他界している。映像音楽作品に、映画『泥の河』(1981)、『潤の街』(1989)、ＴＶドラマ『大いなる朝』(1979／三善晃と共作)、『冬構え』(1985)、『武蔵坊弁慶』(1986)、『信長 KING OF ZIPANGU』(1992)、『街角』(1993)などがある。

「毛利さんはやる気十分だった」と高畑勲はふり返っている。毛利蔵人は３曲の挿入歌の作曲と劇中音楽（ＢＧＭ）を担当した。

主題歌・挿入歌解説

●『赤毛のアン』の主題歌・挿入歌

『赤毛のアン』には２曲の主題歌と６曲の挿入歌がある。そのほかに、劇中でキャラクターが歌う歌もいくつか作られている。本書では、レコード用に作られた歌を「挿入歌」、それ以外で劇中で歌われた曲を「劇中歌」と呼ぶことにする。

主題歌・挿入歌の作詞はすべて岸田衿子が手がけている。岸田衿子が詩を書き、それに曲を付ける形で歌が作られた。
主題歌２曲は三善晃が作・編曲。挿入歌は三善晃と毛利蔵人が分担して作曲・編曲を担当している。

各曲のタイトルには仮のタイトルが付けられていた。以下のリストには、その仮タイトルを曲名のあとに（）で表記した。

《赤毛のアン主題歌・挿入歌リスト》

主題歌

曲名	作詞	作曲	編曲	歌
オープニングテーマ きこえるかしら（赤毛のアン）	岸田衿子	三善 晃	三善 晃	大和田りつこ
エンディングテーマ さめない夢（はしってもはしっても）	岸田衿子	三善 晃	三善 晃	大和田りつこ

挿入歌

曲名	作詞	作曲	編曲	歌
あしたはどんな日（あしたの夢）	岸田衿子	三善 晃	三善 晃	大和田りつこ
森のとびらをあけて （森のとびらをあけて）	岸田衿子	三善 晃	三善 晃	大和田りつこ
涙がこぼれても（涙がひとつぶ）	岸田衿子	毛利蔵人	毛利蔵人	大和田りつこ
花と花とは（ひとりぼっち）	岸田衿子	三善 晃	毛利蔵人	大和田りつこ
ちょうちょみたいに（ほんのしばらく）	岸田衿子	毛利蔵人	毛利蔵人	大和田りつこ
忘れないで（忘れないで）	岸田衿子	毛利蔵人	毛利蔵人	大和田りつこ
ちょうちょみたいに（ほんのしばらく）	岸田衿子	毛利蔵人	毛利蔵人	石毛恭子

高畑勲は『『赤毛のアン』には、少女の気持ちに寄り添って音楽をたくさん入れるつもりだった。」と語っている。そのため、イメージソング的な挿入歌はなく、どの歌もアンの気持ちを表現するものになっている。

音楽的には、詩の言葉のイントネーションに合わせて、１番と２番とで（３番まである場合は３番も）メロディを変えているのが大きな特徴。これは三善晃の曲も、毛利蔵人の曲も共通している。
たとえばオープニング主題歌「きこえるかしら」は、

１番「ゆるやかな丘をぬって」／２番「こもれびの中をぬけて」
１番「白い花の道へ」／２番「もえる雲の下へ」
１番「風のふるさとへ」／２番「なみだつ　みずうみへ」

いずれのフレーズもメロディが違う。そのため、カラオケで歌おうと思ってもＴＶサイズしか知らないと歌えない。原曲を聴き込んでいるかが問われる曲なのだ。

●岸田衿子の詩

作詞を手がけた岸田衿子は詩人・童話作家。女優の岸田今日子の姉である。
詩人としての活動がメインで、作詞の仕事は限られている。岸田衿子が書く詩は、子どものための詩や少年詩が中心だった。平明な言葉で子どもの感性をすくいとった詩は、大人の心も動かす普遍性を持っている。その作風が名作アニメの作詞に生かされた。
『アルプスの少女ハイジ』で初めてアニメソングの作詞を手がけ、以来、「世界名作劇場」枠で『フランダースの犬』『あらいぐまラスカル』の主題歌・挿入歌の作詞を担当。『赤毛のアン』につながった。『アン』以降は、『まんがこども文庫』の主題歌を作詞している（曲は宇野誠一郎）。こちらもアニメ主題歌の域をを超えた広がりと透明感のあるすばらしい詩だった。
『アルプスの少女ハイジ』で高畑作品とかかわった岸田衿子であるが、三善晃ともすでに縁があった。高畑勲が三善晃の音楽に注目したきっかけとして挙げた音楽詩劇「オンディーヌ」の作詞が岸田衿子だったのだ。

岸田衿子は一連の名作アニメの作詞の仕事をふり返って、こう語っている。

「ほとんど少女の頃に、わくわくしながら読んだ、スケールの大きい童話でしたが、それをもう一度胸の中に呼び戻して、子供たちが口ずさめるような歌詞をつくることは、やりがいのある仕事でした。」
「主人公の声を聞きとり、周囲の情景を思い浮かべていると、いつのまにかじぶんも一緒になって

問いかけ、こたえていることに気がつきます。もし歌うとしたら、彼・彼女たちはこんなふうに歌いたいだろう――という歌詞になりました。」
（LP-BOX「日本アニメーション　名作アニメ作品集」1979 年発売・日本コロムビア／解説書より）

どの歌も、主人公である子どもたちの心の声だったのだ。
岸田衿子は残念ながら 2011 年４月に他界している。

●大和田りつこの起用

世界名作劇場の主題歌は『フランダースの犬』(1975)以来、『ペリーヌ物語』(1978)まで４作連続で大杉久美子が歌っている。『赤毛のアン』の主題歌を歌ったのは大和田りつこ。三善晃がテープオーディションで選んだという。何人かの候補の歌手の声を三善晃が聴き、「この声だ」と言って選んだのが大和田りつこだった。

大和田りつこは、歌のお姉さんになりたくて歌手をめざしたという。武蔵野音楽大学声楽科に進学。合格してすぐにＮＨＫに電話して「歌のお姉さんの募集はいつですか？」とたずねたそうだ。残念ながらそのときは募集してなかったが、のちの機会に応募して合格。在学中にＮＨＫ教育テレビ（現在のＥテレ）『たのしいきょうしつ』で歌のお姉さんとしてデビュー。その後、ＴＢＳ『ワンツージャンプ！』、ＮＨＫ教育『ワンツー・どん』などに出演した。初のアニメ主題歌の仕事は、『ワンツージャンプ！』内で放送されていた『首長あひるのエリオくん』の主題歌。単独作品ではＴＶアニメ『ろぼっ子ビートン』(1976)が主題歌デビューになった。

『ろぼっ子ビートン』は筆者もリアルタイムで聴いて、新鮮な歌声に「おおっ！」と思った。『ろぼっ子ビートン』という番組自体も好きだったのだ。
大和田りつこは『赤毛のアン』以降、『キリン名曲ロマン劇場』(1979)、『まいっちんぐマチコ先生』(1981／ＥＤのみ)、『パソコントラベル探偵団』(1983／ＯＰのみ)等の主題歌を歌唱。そのほか、ビクターのアニメ主題歌混載盤で「星の子チョビン」「魔女っ子メグちゃん」「よあけのみち」「キャンディ・キャンディ」などのカヴァーを歌っている。現在は、子どものためのコンサートやミュージカルなどで活躍中である。

主題歌録音のスタジオで三善晃は新聞紙ほどもある大きな総譜（スコア）を見ながらレコーディ

ングに立ち会っていた。それがとても印象的だったと大和田りつこはインタビューで語っている。レコーディングに挑んだ大和田りつこは、壮大なオーケストレーションに圧倒された。「歌が乗らなくても、十分音楽として通用する」と感動したそうである。

挿入歌の録音はあわただしかった。放送が始まる数日前というぎりぎりのスケジュールで録音が行われたのだ。世界名作劇場の挿入歌は、放送が始まった少し経ってからレコード用に録音されることが多い。本作の場合、当初から劇中に挿入歌を流すプランがあった。そのため、放送開始に間に合わせるように録音がスケジュールされたのだ。

挿入歌の中で１曲だけ、「ちょうちょみたいに」が石毛恭子の歌唱になっている。石毛恭子も歌のお姉さん出身だが、声の感じは大和田りつこより少しお姉さんのイメージである。

大和田りつこは『赤毛のアン』の放送が始まってから、カナダのグリーン・ゲイブルズを訪れた。原作を読んでイメージしたままの光景に感動したそうだ。

挿入歌の中では「森のとびらをあけて」と「あしたはどんな日」が印象に残っていると大和田りつこは語っている。

2003 年に『赤毛のアン』がミュージカルになったとき、大和田りつこはリンド夫人役で出演した。もちろん歌も披露している。このミュージカルは毎年上演されるロングランとなった。大和田りつこは初演からずっと変わらず、リンド夫人として出演し続けている。

●主題歌

きこえるかしら

作詞：岸田衿子　作曲・編曲：三善 晃　歌：大和田りつこ

仮タイトルは「赤毛のアン」。

４小節の短いイントロからぐっと引き込まれる。思わず身を乗り出してしまうほどのみごとなオーケストレーションに圧倒される。

迎えの馬車を待つアンの気持ちと想像を歌った詩。岸田衿子は「アンが駅でマシュウの馬車を一心不乱に待っているときの気持ち“期待感”ですね。それを詞にしてみました。」と語っている。アンの期待感がテレビを観る子どもたちの「“赤毛のアン”ってどんなお話なのかしら？」という期待と重なるといいなと思って書いたという。

譜面は２分の２拍子（４分の２拍子ではない）で書かれている。馬車が走る軽快感を出すためのこだわりなのだろう。オーケストラは、サックス４本、クラリネット２本、トロンボーン４本、打楽器、エレクトーン、ピアノ、弦楽器という特殊な編成。躍動的なリズムがアンの気持ちの高まりを描写する。テンプル・ブロックの音がまるで馬のひづめの音のようだ。古典的なクラシック音楽では使われないサックスがモダンな響きを聴かせる。テンプル・ブロックもサックスも「翼は心につけて」から引き継がれた要素である。

通常のポップスの曲のような「歌＋伴奏」という構造ではなく、ヴォーカルもオーケストラの一部となり、歌とオケが一体となってひとつの音楽を奏でる。それまでのアニメソングにはなかった曲想で、ちょっとした衝撃だった。

ＴＶサイズのオケはフルサイズとは別に録音されている。マスターテープには、オープニング＆エンディングのＴＶサイズ・カラオケ音源（ステレオ）も残されていたが、残念ながら収録時間の都合でＣＤには入れられなかった。リコーダーによるメロオケが作られたが本編では使用されていない。

オープニング映像はわずか７カットで構成。高畑勲のコンテである。馬車に乗るアンの姿をイマジネーション豊かに見せる映像だ。絵と音楽が融合した名オープニングになった。

さめない夢

作詞：岸田衿子　作曲・編曲：三善 晃　歌：大和田りつこ

仮タイトルは「はしってもはしっても」。

グリーン・ゲイブルズに置いてもらえることになったアンの幸せな気持ちを表現する歌。第６章に挿入歌として使用されている。

三善晃自身が編曲した『赤毛のアン　ピアノ曲集』（全音楽譜出版社）の楽譜では、この曲も２分の２拍子で書かれている。オープニング同様、軽やかに駆けるイメージ。16 分音符で踊るピアノのイントロが印象的だ。歌の伴奏もピアノが主役になる。

Ａメロの「もっと遠く」で歌がいったん途切れ、たっぷりしたオーケストラの演奏が挿入される。アンのよろこびを描写する華麗にして壮大なオーケストレーションである。この部分は「翼は心につけて」のオーケストレーションから発展したものだ。

大きく盛り上がったあとに、「花の中で一日は終わる」とヴォーカルが戻ってくる。なんと美しい歌だろう。日本アニメ音楽史に残る名曲である。

『赤毛のアン』の主題歌・挿入歌の中で、本曲のみメロオケが作られていない。

エンディングはセピア色の背景に飾り枠（その中にクレジットが表記される）のみという異色のもの。高畑監督は「この音楽に絵は付けられない」と一切絵を使わなかったという（出典未確認）。

●挿入歌

６曲の挿入歌はすべて劇中に使用されている。これは「世界名作劇場」の全作品を通じても稀有な例である。ただし、前述のとおり、高畑勲は劇中での使用を想定して歌を作った証言しているので、最初のプラン通りだったということだ。

あしたはどんな日

作詞：岸田衿子　作曲・編曲：三善 晃　歌：大和田りつこ

仮タイトルは「あしたの夢」。

高畑勲が印象深い挿入歌として挙げている２曲のうちの１曲。

アンの未来への期待と不安を歌ったブルースの曲である。ややメランコリックで幻想的な曲調でアンの気持ちを描写する。サビで伴奏がわずかに希望をのぞかせる雰囲気になるのが絶妙である。

カスバート家が本当にほしかったのは男の子だったと知ったアンが、自分の行く末を案じる。その気持ちに寄り添って、第２章と第３章に歌入りで挿入された。

また、第 11 章、16 章、30 章、33 章、42 章、49 章にメロオケが挿入された（厳密にはメロオケではなく、ＢＧＭ用に演奏しなおしたもの）。歌い出しの「あしたはどんな日」だけヴォーカルが入り、以降はソロ・ヴァイオリンがメロディを引き継ぐユニークな構成になっている。

森のとびらをあけて

作詞：岸田衿子　作曲・編曲：三善 晃　歌：大和田りつこ

仮タイトルは同じく「森のとびらをあけて」。

高畑勲が印象深い挿入歌として挙げたもう１曲がこの歌。「グリーン・ゲイブルズのアン」を歌ったアンのテーマのような曲である。

「赤い髪の女の子　さがしにおいで」という詩なので、第三者視点の歌ともとれるが、最後に「呼んでいるのはだれ」とアンの声が登場する。これは、アンが「森の中にいる自分を誰かが呼んでいる……」と想像する気持ちを歌った歌ではないだろうか。それは孤児院にいるひとりぼっちのアンではなく、「グリーン・ゲイブルズのアン」なのだ。

劇中では第３章、35 章、42 章、46 章に使用。ギターによるメロオケが作られたが、本編では使用されなかった（よって、残念ながらＣＤには未収録）。

涙がこぼれても

作詞：岸田衿子　作曲・編曲：毛利蔵人　歌：大和田りつこ

仮タイトルは「涙がひとつぶ」。

アヴォンリーの美しい自然に癒されるアンの心情を歌った曲。

ほかの挿入歌と違って、本曲はレコード用フルサイズとは別に１分 24 秒のＴＶサイズが録音されている。エンディング主題歌候補のひとつだったのではないだろうか？（マスターテープにも「ＴＶサイズ」のタイトルで収録されている）

劇中ではフルサイズが第 18 章に、ＴＶサイズが第７章、８章、50 章に挿入された。リコーダーによるメロオケも作られているが、そちらは本編では未使用。メロオケはＣＤ「名作アニメ ミュージックサンプラー」にしか収録されていない。

最終回のラストシーンで流れるのが本曲のＴＶサイズ。『赤毛のアン』の物語を締めくくる曲である。それが、本曲が「エンディング候補だったのでは？」と考える根拠のひとつになっている。

花と花とは

作詞：岸田衿子　作曲：三善 晃／編曲：毛利蔵人　歌：大和田りつこ

仮タイトルは「ひとりぼっち」。

優雅な弦合奏がリードするおだやかな曲。花畑で空想にふけるアンの気持ちを歌った内容である。「ひとりぼっちで」のフレーズが登場するが悲しい曲調ではない。そこはかとない淋しさはあるものの、アンは自分の想像の世界を楽しんでいるのだ。

第８章で、アンが日曜学校に行く途中で花畑を見つけ、学校のことをすっかり忘れて遊んでしまう場面にメロオケが使用された。同じエピソードの終盤、日曜学校になじめなかったアンが湖畔でため息をつく場面に歌入りが流れる。本編での使用はこの２箇所のみ。このエピソードのために作られたような曲である。

忘れないで

作詞：岸田衿子　作曲・編曲：毛利蔵人　歌：大和田りつこ

仮タイトルは「忘れないで」。

『赤毛のアン』挿入歌の中でも屈指の名曲のひとつ。アンとダイアナの「心の友の誓い」をテーマにした曲だ。

単なる友情の曲ではない。ふたりが「心の友」となるおごそかな瞬間を歌った気高くも美しい曲である。歌入りは第９章「おごおかな誓い」で流れたほか、ふたりの友情を表す曲として、第 17 章、25 章、34 章に使用。メロオケが第 44 章で使用されている。

ちょうちょみたいに
作詞：岸田衿子　作曲・編曲：毛利蔵人　歌：大和田りつこ

仮タイトルは「ほんのしばらく」。
想像の中でやすらぐアンの気分を歌った曲。本曲のみ石毛恭子が歌っている。
第 14 章「教室騒動」でアンが教室で空想にふけっている場面に歌入りで使用。また、第 49 章の海辺で自身の将来に想いを馳せるアンの場面にも歌入りが使用された。第８章での使い方と 49 章での使い方は意味が異なる。第 49 章は成長したアンがひとときの安らかな時間をかみしめる場面。アンの心はもう想像の世界に遊んではいない。
ヴィブラフォンによるメロオケが作られたが、本編では使用されなかった。

●劇中歌

はしばみ谷のネリー

第 10 章でダイアナがアンに歌って教えた歌。以降、たびたび劇中に登場する。
この歌は原作にも登場するが、歌詞は書かれていない。高畑勲はインタビューの中でこのそのことに触れて、「しようがないから、向こうで買って来た民謡のレコードをいろいろ聞きながら、採譜して、僕が勝手な歌詞をでっち上げて、くっつけて、歌ってもらってるわけです。」と語っている。曲のベースになったのは聖歌 396 番（「十字架のかげに」）として知られる曲である。
「はしばみ谷のネリー」はアヴォンリーではよく知られた歌らしく、第 13 章、23 章、34 章ではほかの子どもたちも歌っている。第 10 章のラストではギターによるインスト・ヴァージョンも流れた。このインスト音源は未発見でＣＤには収録されていない。

第 10 章に流れるギターを伴奏にしたヴァージョンでは、ダイアナのソロのパートとアンとダイアナのデュエットのパートは別々に録音されている。ＣＤでは２つの音源を編集して収録した。だが、編集がうまくなくて、ＴＶで流れたものとは少しタイミングが違ってしまった。機会があれば編集をやり直したい曲である。

アヴォンリー小学校校歌

第 28 章のクリスマスのコンサートの場面でダイアナが独唱する歌。アヴォンリーの学校の校歌らしい。登場するのはこの回だけである。作詞・作曲は不明だ。

ＣＤ収録にあたり「アヴォンリー小学校校歌」とタイトルを付けたのは筆者。しかし、よく考えるとアヴォンリーの学校は「小学校」ではない。日本でいえば中学生にあたる年齢の子も一緒に通っているのだ。劇中でも「アヴォンリーの学校」としか呼ばれてなかったと思う（映像では学校の外壁に「AVONLEA SCHOOL」と書かれている）。本当は「アヴォンリー学校校歌」とすべきなのだろう。すみません。

立ち読み版はここまでです。

ご覧いただき、ありがとうございました。